

---

# Chaos\_Mythology\_Online

アマノガサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Chaos | Mythology | Online

### 【Nコード】

N8274Y

### 【作者名】

アマノガサ

### 【あらすじ】

通常のMMORPGと互換性を持って発売されたVRMMORPGのキラータイトル”Chaos | Mythology | Online”。その日、大鳥圭介は行きつけのアクセスポイント喫茶からゲームへログインしていた。いつもの仲間と過ごす楽しい時間。しかし、それは唐突に終わりを告げる。ボスモブ討伐直後に急激なめまいに襲われた圭介は意識を失い、次に目が覚めたときにはゲームの世界に囚われてしまっていた。意識のない間に過ぎ去った空白の一ヶ月。ログアウトが出来ないという現状。今までのゲームとは

若干異なるリアル感。そして、いつの間にか変更されて”黄色表示”となった頭上のネーム群。不可思議な事だらけの中、圭介はプレイヤー『鳳牙』として仲間と共にCMOの世界に、そして自分たちが起こった謎を追う。仮想と現実、双方の苦難が行く先に立ち塞がる事も知らずに。

## 序章

### 序章

「ヴオオオオッ!!」

眼前の巨大な漆黒の狼の放つ咆哮が耳朵を打つ。

ビリビリと感じる空気の振動。五メートル級以上の獣族モンスター固有スキル、スタン気絶効果を持つ獣咆だ。ビーストローア効果範囲はモンスターによってまちまちだが、今回は相手を中心とした半径六メートルほどまで効果が及んでしまうらしい。

「ぐおっ……!」

十分な距離をとっていたつもりだったのだろう。鈍色の西洋鎧を着込む剣士は驚きの声を漏らして片膝をつき、その背後で僧服姿の女が腰を抜かしてぺたんと座り込む。

「くっそ! 何でこんな所にフェンリルシャドーなんて出てくるんだよ!」

何とか体勢を立て直した剣士の、声からして男は、震える手で両手剣を構えなおす。

幅広のグレートソードは実用性で見栄えのよさから両手剣士に好まれる汎用装備だが、その重厚な存在感も目の前の凶獣に対するにはあまりにも心許ない物だった。

剣士はちらりと背後の様子を探る。腰を抜かした僧侶はまだ立ち

直れていない。

敵とのレベル差のせいもあるが、僧侶は剣士に比べてスタミナを消費する物理系特技に弱い。見た目はマナポイント<sup>MP</sup>を消費する魔法系特技<sup>マジックスキル</sup>のようで、獣咆は前者に属していた。

「ミリア！ 回復までどれくらいかかる！？」

「ごめんキール！ 気絶ゲージまだ半分以上も残ってるの。全然動けない！」

半分以上という言葉聞いて、剣士 キールの胸中に絶望が宿る。自身が立ち直るまでに要した時間から計算しても、それはあまりに長すぎた。おそらく、物理系に弱い相手に対する特殊効果が付与されているのだろう。

僧侶 ミリアの支援をあてにできなくなったキールは、急いで自分の持ち物を確認する。

自己回復用のヒールポット<sup>POT</sup>を持つてはいるが、これは使用後にクールタイムが存在するため連続使用が出来ない。

戦闘開始直後の不意を突かれて受けたダメージは、たったの一撃でキールのヒットポイント<sup>HP</sup>を三分の一も奪い去ってた。ミリアの回復魔法であれば二回で全快出来るが、ポットでは三回は使用しなくてはならない。

ギリ貧は必至の展開だ。

このままでは共倒れになると判断し、わずかな逡巡の末にキールは自分を囿にミリアを逃がすことを選択した。

「ミリア！ 俺が何とかこいつを引き付けるから、君はその間に逃

「げてくれ！」

覚悟を決め、キールは大剣を背負うようにして構えて漆黒の巨狼に突撃を仕掛ける。

「キール！？」

背後からミリアの悲鳴が聞こえてくる。何とかして、彼女が気絶から立ち直れるだけの時間を稼がなければならない。

デスペナルティはそれなりに痛い、最悪ソロでのレベル上げが簡単な戦士系である自分の方が取り戻しやすいだろうという判断だった。

「うおおおっ！」

キールは巨狼の眼前で急制動をかけ、前へとつんのめる勢いをそのままに背負い構えていたグレートソードを一気に振り切った。

「ヴオッ！」

ザシュツ、というヒットサウンドと剣閃をイメージしたエフェクトが生じ、巨狼のヒットポイントゲージがわずかに減少する。

「げっ！ 『地割』<sup>ちかつ</sup>使ってこれかよ！ 洒落にならねえ！」

『地割』は現在キールが使えるスキルの中で最大の攻撃力があつた。だというのに、それをもつてしても毛筋ほどのダメージしか与える事が出来ない。

本来であればこのフィールドにいるモブ<sup>mob</sup>はキールの『地割』一撃

で倒せるはずだったのだ。下見の段階でおおよそのモブと戦闘を行い、無理なく捌けると判断したからこそ、キールはミリアとのレベル上げにこの場所を選んだのだ。

だというのに、ポップ<sup>POP</sup>するはずの無いモブが突然襲撃を仕掛けてきて、今の状況へ繋がっている。

「ぐあっ！」

それでも多少なりともいける可能性を期待していたキールは、最大の一撃がまるで通用しないことに動揺し、フェンリルシャドーの反撃をまともに受けてしまう。

大きな前足に払われ、地面を転がった。

「いやあっ！ キール！？」

ミリアの悲鳴が聞こえる。駄目だ、助けなければ。  
軋む体に鞭を打ち、キールはグレートソードを杖代わりに立ち上がって、ふと自分の上に影が差したのを感じた。  
嫌な予感と共に見上げれば、そこには大口を開けた巨狼の姿。なおかつその口の中に炎の塊が生じているのが見える。

「やべ、<sup>フレイムフレース</sup>火炎の息か！」

先の獣咆と違い、火炎の息は純粋な魔法系スキルだ。剣士であるキールとはすこぶる相性が悪い攻撃である。

「悪いミリア！ 俺死んだわ！ 何とか逃げ切ってくれ！」  
「キール！」

覚悟を決めた剣士キール。その名を叫ぶ僧侶ミリア。二人の死は免れない状況。

そのはずだった。

「どこかの映画のワンシーンみたいな状況だよな」  
「……え？」

キールはどこかのんびりした口調の声を聞いて、思わず周りを見渡した。直後、

「ギャンッ！」

大砲をぶつ放したかのような轟音が鼓膜を震わせたかと思うと、目の前にいたはずの巨狼が犬みたいな悲鳴を上げて吹っ飛んでいくさまを目撃した。

キールがあまりの状況に茫然としてみると、その目前に急に人影が降ってきて、彼は反射的に間合いを取った。

武器を構えつつ、目の前の人影を観察する。

身長は百八十センチで設定しているキールよりやや低い。服装として、上は薄手の黒いノースリーブ。背中側は布面積が少なく、大きく肌が露出している。下は改造された黒い袴のようなズボンで、紅とオレンジのファイアパターンがアクセントになっていた。両前腕には手甲か何かの上に黒布が巻かれ、左上腕には赤味がかつた金色のリングを付けており、背後から見た髪の色は銀色をしていた。

しかし、特筆すべきはそんなものではない。



「え？ いや、まさか……」

キールの視線は二つの場所を行ったりきたりしている。

一つ目はその綺麗な銀髪にそびえる二つの耳。いわゆる獣耳というやつだ。ピンとたった二つの耳は、何かに反応するように時折ぴくぴくと動いている。

もう一つはその腰の辺り。髪の毛の色と同じ銀色の毛を持つふさふさの尻尾。それがパタパタと左右に揺れていた。

「あんたもしかして」

極めつけはキャラの頭上に表示される所属ギルドとキャラクターネームの黄色い文字色。

その特徴的な風体から、キールは一つの名前を思い出す。

「イエローネーム 銀狼ぎんろうの鳳牙ほうがか!？」

「……だったら、何？」

ゆらりと振り返った獣耳の男性キャラクターは、その銀色の瞳を半目にし、ややうんざりしたような表情をしていた。

## 序章（後書き）

H23	
11	
25	文章レイアウト変更

## その1

### 第一章

二十二世紀の終わり頃、アメリカから輸入した技術を応用し、日本で人類史上初となる仮想世界、ヴァーチャル・リアリティ・ワールド（通称VRW）が構築された。

現実世界の東京都をまるまる模したその世界は『裏東京』と仮称され、専用の機器を利用することであたかも本物の世界であるかのように様々な現象を体感する事が出来た。

脳科学の発展によって人体の五つの感覚全ての仕組みが解明され、デジタル化することに成功していた事が最大の成功要因だ。

人々は現実世界に限りなく近い生活を、仮想世界でも行えるようになった。

時が進み、VRが一般大衆にとって当たり前の存在となった頃、ゲーム業界がこの仮想世界に目を付けた。

現実世界を模した世界はその莫大なデータ要領からとんでもなくコストがかかってしまうが、必要最低限の見ため（ハリボテ）が実現すれば世界として成り立つゲームにおいて、この懸念は何の制約にもならなかった。

インターネット上で普及するMMO-RPGをはじめとするネットゲームとVRが結びついたのは、必然と言ってよかっただろう。

VRを用いたネットゲームはたちまちのうちに大ヒットを飛ばし、日本各所でVR機器を設置した漫画喫茶ならぬAP喫茶や、VR機

アクセスポイント

器完備のビジネスホテルが大流行した。

金銭的に余裕のある者の中には自宅にVR機器を設置して利用するものもいたが、大方の利用者はスペース的な問題も含めて外部に機器の設置を求めた。

おおとりけいすけ

大鳥圭介もそんな大勢の一人だ。自室にVR機器を設置する余裕などあるはずもなく、ゲームの記録媒体である専用カードだけを持ち歩くほうが気楽だった。

加えて、特定のアクセスポイント喫茶は各ゲーム企業の出資で経営されているため、食事などを利用しなければ基本料金が無料というありがたい状態だった。ただし、当然ながら該当企業のVRゲーム利用者に限ったのである。ただ寝るためなどの利用は認められない。

圭介は行きつけのAP喫茶に立ち寄り、手続きを経て個室へと至っていた。

昔のSF映画に出てきそうな冷凍睡眠カプセルを思わせるVR機器。

圭介は慣れた手つきでVR機器の上部カバーを開け、中に納まっているリクライニングに腰掛ける。同時にカバーが閉じられて一切の光が届かなくなるが、すぐに周辺機器が鮮やかな色合いで発光を始めるため、光量としては十分だった。

右手のタッチパネルから”Chaos | Mythology | Online”のアイコンを選択してタップすると、CMOというロゴが表示され、ログイン画面へと移行する。

圭介はパネル下部のスリットにカードを差込むと、配線だらけのヘッドマウントを被り、手はリクライニングと一体になっている専用

のポケットに突っ込んだ。

そのまま目を閉じてゆったりとした姿勢で待つ。数秒の後、ピリツとした痛みが全身に走ると同時に、圭介は爽やかなそよ風をその身に感じた。

目を開けばそこは、狭いVR機器の中などではなく、見渡す限りの広大な草原の真っ只中だった。

「ああ、それで鳳牙はそんなところにいたってわけか」

「そういう事です。最後にログインしたのがテスト前で、みんなとイベントやった後でしたから、ちょっと忘れてました」

圭介 鳳牙は、酒場の椅子に腰掛け、目の前のグラスの中身をあおった。酸味の利いた爽やかな柑橘系の味が口の中に広がる。

新製品という事で頼んだものだが、なかなか好みの味だった。鳳牙は思わずパタパタと尻尾が振る。

「鳳牙はリアルだと高校生だもんな」

鳳牙の隣に座るのは、金色の糸で魔力文字の刺繍が施された丈の長い純白のローブを着込む青年だった。今は座っているが、立った時の身長は鳳牙と大差が無い。翡翠色の髪の毛に黄色の瞳をしており、鼻の上にスクウェア型でアンダーリムの眼鏡を引っ掛けている。

実に優等生然とした出で立ちであった。

「で、学期末テストの具合はどうだった？　僕が張ったヤマは当たってたかい？」

「はい、フェルドさんに教えてもらったところはバッチリだったかと。英語が相変わらずでしたけど、赤点ではないと思います」

翡翠髪の青年　フェルドは都内の大学に通う大学生一年生であり、鳳牙の高校のOBでもあった。恩師がまだ教鞭を執っていると知ったフェルドが、テスト勉強に悩む鳳牙に策を授けたのである。

「そっか。という事は、村やんのテスト傾向は未だ伝統に沿ったままってことだな」

「そうみたいです、ね」

鳳牙はぐーっと腕と身体を伸ばし、しばらくキープしてから脱力してカウンターに寄りかかった。

ややささくれた木の感触が頬を。塗られたニスの香りが鼻をくすぐり、頭でいくら理解していても、それが現実ではないという事を忘れてしまいそうになる。

ゆっくりと身を起こして周囲を見回せば、西部劇に出てきそうな内装の店には鳳牙とフェルド以外に人影はなく、椅子は全てテーブルの上に逆さまに乘せられていた。

「しかし、この酒場はいつも寂しいですね。近くにいい狩場も人気のボスモブもないせいなんでしょうけど」

「そうだね。VRログインをしてない人とか、複数アカウントログインしている人の放置露店キャラもないってところが、もうなんともね」

鳳牙は無言で頷いて同意を示す。

この閑古鳥は何も酒場に限った事ではない。現在位置の『月森の町トリエル』は隣接するフィールドへの冒険の拠点となるタウンエリアなのだが、その隣接フィールドエリアの人气が無いために誰もいないのである。

「まあ、そのおかげでギルドに入っていない俺でも雑音を気にせずゆっくり会話出来るんですけどね。ギルドチャットも便利そうですけど、あれって旧来のチャットウィンドウみたいなのが開いて音声会話するんじゃないっけ？」

「うん。そのウィンドウを選択しているかいないかで自分の通常音声チャットとギルド音声チャットを使い分けるんだ。大体の人が普段はウィンドウを開きっぱなしで音声だけカットしてるみたいだね。ちなみに、僕もそうしてるよ」

フェルドが鳳牙から見て何もない場所を指で示している。つまりは、そこにウィンドウを置いているという事なのだろう。

ゲームを始めてから一度もギルドに属したことの無い鳳牙にとっては、完全に未知の代物である。

「でも、ギルドの話なんてどうしたんだい？ 鳳牙。もしかして、僕んとこのギルドに入る決心がついたとか？」

「あー……いえ、毎度毎度ですみませんけど、やっぱり俺はギルドに入る気は無いです」

鳳牙が苦笑いを返すと、だよねえとフェルドがわざとらしく肩を落とした。

ふと、鳳牙はフェルドの頭上に表示される白字のネーム群を眺め

る。二段構成になっており、上段が所属ギルド名『アルメリア騎士団』。下段がキャラクター名『フェルド』だ。

アルメリア騎士団はCMO古参ギルドの一つで、登録人数が二百人を超える大所帯ギルドだ。丁寧な初心者支援をするギルドとして有名で、直接的な関係がほぼ無い鳳牙もソロ活動中に何度か辻<sup>リザレクション</sup>回復魔法や辻蘇生魔法を受けた事がある。

「あの一件以来、僕んとこのマスターから鳳牙をなんとしても引き入れてくれて結構な頻度で催促がくるんだよね。本人にその気は無いですって何度も言ってるんだけど、ほら、鳳牙は元々『リミテッドスキル』持ちだったのに加えて唯一のレア職業キャラになっちゃってるからね」

「フェルドさんもしリミテッド持ってるじゃないですか。レア職業はイベントの褒章品で、偶然なれただけですよ」

ぼりぼりと、鳳牙は人差し指で頬をかく。

「ためしにつて『<sup>ライカンスロープ</sup>獣人』に転職したのはよかったんですけど、VRプレイヤーにとっては本来の自分じゃない物が付加されてる分、最初は感覚の違いに慣れるのに時間かかりましたよ」

鳳牙はぴくぴくと頭の上についている獣耳を動かしたり、ふさふさの毛を持つ尻尾をパタパタと器用に操ってみせる。

実のところ、鳳牙はこれらの自然な動作を習得するのに二ヶ月近く時間を使っている。上手くコツを掴んで以降は違和感なく操れるようになったので良かったのだが、今では現実世界にいるときでもふとした拍子に無いはずのものを意識している事があり、幻肢に近い感覚を持っていた。



「もつとも、もう一個の能力の方に比べたら、尻尾くらいわけないと思えましたけどね」

「ああ、あれね。うちの女性ギルメンに絶大な人気を誇ってたよ。何か『<sup>テーラー</sup>裁縫師』とか『<sup>ジュエルメイカー</sup>宝石細工師』にチョーカーの作成依頼に走ってた人もいたから、誘拐されないように気をつけてね？」

「俺は犬じゃなくて狼なんですけどね」

「いや、そういう話じゃないから。まあ、誘拐云々は冗談なんだけどさ」

あははとフェルドがやや渴いた笑いを漏らす。

「ま、とにかくにもテストは終わったってことだもんね」

「はい。えっと、そういうえば一週間ぶりですか？　こうやってフェルドさんと話すのは」

「うん。それくらいかな。……あ、マスターさっきの二杯お願いします」

ニコニコ顔で頷くフェルドがカウンターの向こうにいる強面のバーテンに声をかけると、すぐさまグラスが鳳牙とフェルドの前に出される。

「え？　フェルドさん？」

「思いつきだけど、試験終了祝いつてやつだよ。好みの味だったんだろっ？」

自分の分も注文されたことを不思議に思った鳳牙に対し、フェルドは片目をつぶってウィンクをしてくる。

「ま、一応君って僕の後輩なわけだし、おごらせてもらっつよ」

「あ、なるほど。それじゃあ、せっかくなんで遠慮なく」

鳳牙はそつとグラスを持ち上げ、顔の位置に掲げてフェルドに向き直る。

それを確認すると、フェルドも同じようにグラスを掲げ、コホンと咳払いをする。

「えー、無事にテストを乗り越えた鳳牙と」

「あ、えーつと、助力を惜しまなかったフェルドさんとの」

「「再会を祝して」」

チン、と小気味いい音を立てて二つのグラスが打ち合わされ、互いに一息に中身をあおる。

「……ふー。うん、これ確かに美味しいね」

「そうですね。普通、渋みというか苦味があるはずなんですけど、これはすごく爽やかな後味なんですよね」

味覚のデジタル化によって、仮想世界で食べたり飲んだりする物はたとえゲームであっても味が再現され、直接楽しむ事が出来るようになってる。

ただし、あくまで感じるだけで空腹を満たしたり栄養の補給など出来るわけではない。

「下手に仮想世界でうまい物食べると、リアルに戻った時にショックだよな」

「ああ、それ分かります。でも、こっちではいくら食べてもお腹膨れな」

『ハローおはろーこんにちはこんばんはおはようございまーす』

突然、鳳牙の言葉に被って元気な女の子の声が直接頭の中に響いてきた。

特定の相手に声を届ける【ささやき】という会話機能だ。複数名にも設定できるため、その声はフェルドにも届いたようだった。彼は苦笑しながら肩をすくめている。

『なんですよ。鳳兄ほうにいログインしたんなら教えてくださいよね。今日こそボスからレアアイテムドロップさせるんだから。って、そういえば今何処ー？』  
『相変わらず元気そうだな、小燕シャオイエン。今はトリエルの酒場でフェルドさんと一緒だよ』

チャット設定を変更して、鳳牙も小燕に【ささやき】を返す。

『おー、フェル兄も一緒かー。あいさー。十分くらいで行くから待つててちょーだい』  
『分かった』

通信が終わり、鳳牙はチャットの設定を元に戻した。

「小燕が十分くらいで来るそうです」  
「うん。じゃあ、後は」  
「拙者をお探しか？」  
「「うおおっ！」」

突如天井から逆さまに生えてきた黒装束に驚き、鳳牙とフェルドはそろって椅子から転げ落ちた。

「うぬ。すまぬで御座る。『煌星忍軍<sup>きらぼし</sup>』の報告会を終えてすっ飛んで参ったので御座るが、少々驚かせ過ぎ申したか」

しゅたっ、と腕を組みつつ床に降り立つその姿は、一部の間もなく一目見て忍者と呼称せざるを得ないものだった。

ただし、筋骨隆々では切れんばかりの巨体をどうにかこうにかびっちぴちに収めているという、何かの冗談のような状態だったが。

「鉄馬<sup>てつま</sup>！ お前わざとやってるだろ！？ 何をどうすっ飛んでくれば天井から生えてくるんだ！」

床に尻餅をつきながら、フェルドが筋肉忍者に対して怒りをあらわにしている。現実世界で二人は同じ大学に通う友人同士なので、普段は物腰の柔らかいフェルドもことこの忍者に対してはかなり素が出てしまう事がある。

「フェルド殿。今の拙者は鉄馬では御座らん。アルタイルで御座る」

装束から唯一見える青い瞳が、不平を伝えるようにわずかに細まった。

「あ、ああ悪いついいつもの調子で　　って、そうじゃなくてだな

……」

「アルタイルさん、その巨体で忍ばれて驚かされると、ちょっと心臓に悪いです」

フェルドがなんとなく言ったものかと悩んでいるのを見て、鳳牙が助け舟を出す。普段から気心が知れていればこそ言い方に悩む事もある

るのだろつ。こういう場合は他人から言つた方が効果的である。

「うぬ。鳳牙殿がそう言うのであれば、今のような登場は金輪際止めておくで御座る」

アルタイルががっしりした腕を組んだまま鷹揚に頷いた。

「ところで、今の天井から来たのつてもしかして『壁歩き』ですか？ 忍者のマスタースキルの」

「うむ。鳳牙殿がテストの間、フェルド殿に付き合ってもらつて忍びの里の首領と一騎打ちをし申してな。見事忍者のマスタースキル解放と相成つたわけで御座る」

アルタイルがボディービルダーのようなポージングを取る。伸縮性に富む素材のはずの黒装束がみちみちと悲鳴を上げているような気がした。

「へ、へえ。『壁歩き』つて天井も歩けるんですね。地下迷宮の天井から見下ろしたら面白いだろつなあ」

「うぬ。それは考えなかつたで御座る。今度やつてみて、スクリーンショットをブログにでも貼るで御座る。む、亭主。拙者にもこちらと同じ飲み物を頼むで御座る」

アルタイルが注文と同時に現れたグラスを大きな手で掴むと、

「遅れ申したが、テストご苦労だったので御座る。鳳牙殿」

椅子から落ちても手放さなかつた鳳牙のグラスにチンと合わせてくる。

「ありがとうございます」

「さすれば、次はもう夏休みで御座るな。フェルド殿、拙者らはいつからが夏季休業であつたか？」

「え？ ああ、えっと」

服に付いた埃をパンパンと払いつつ、フェルドが中空を見つめる。鳳牙からは見えないが、今フェルドの前にはカレンダーが表示されているはずだ。

「今日が六日で海の日が十九日だから、今日を入れて後十四日だな。鳳牙も同じじゃない？」

「そうですね。海の日からですから同じです」

「はいはいはい。小燕ちゃんもその日から夏休みです」

突然、元気のいい声が会話に混ざってきた。

三人そろってその声のした酒場の入り口へ視線を向けると、全身ごてごてのフルプレートメイルにフルフェイスのカクカクしいヘルメットまで装備した、それでいてものすごくちゃんまい背丈のキャラがビシッと右手を上げているが視界に入ってくる。

頭上には『小燕』というネームだけが白い字で表示されており、彼女もギルド未所属であることがうかがえた。

「うぬ。小燕殿で御座るか」

「きっかり十分だね。えらいえらい」

「小燕、そのバケツみたいな頭防具、何？」

アルタイル、フェルド、鳳牙が三者三様の返事を返すと、

「はいはい小燕ちゃんですよ。えへへ、褒められちった。バケツとは何だバケツとはー」

小燕から忙しく三通りの返事が返ってきた。

彼女うんしょんしょとヘルメットを取り払うと、ルビーのような紅い瞳をさらけ出す。髪の毛はポニーテールになっており、彼女が首を振るのにあわせて左右に揺れていた。まさに子どもといった可愛らしい顔立ちで、ぷっくりとしたお餅のような頬には、左側にだけ薄赤の太線でデフォルメされた雲のような刺青が施してある。

「あー、何か喉かわいた。マスター、皆が飲んでるの頂戴。お酒だったら別のでいーや」

注文と同時にカウンターに現れたグラスを取り、鳳牙は小燕に手渡してやる。

「ありー。んぐんぐ。あ、これ美味しい。でも結構高いなあ。お財布ががが。ま、狩りで稼げばいいんだろうけど」

グラスを見つめて眉をひそめる小燕。鳳牙はその態度に違和感を覚え、

「小燕。君、結構お金溜め込んでたよね」

「あ、うん。でも欲しいもの出来て使っちゃった」

てへっ、と舌を出しつつ小燕が自分の頭をコツンと小突いた。

「欲しいもの？」

「そぞ。御影<sup>みかげ</sup>じーちゃんの銘入り防具一式ってか、今着てるやつ」

小燕がガシャガシャと音を立てながら自分の体を示してくる。よくよく見れば、その防具のデザインに鳳牙は見覚えが無い。

こんなデザインのプレートメールがあったらどうかと鳳牙が首をかしげていると、

「鳳牙殿のテスト期間中に武具追加のアップデートがあったで御座る。その様子では、まだ掲示板などを見てはおらぬようで御座るな」

アルタイルに言われて、鳳牙はそういえばとゲーム内から閲覧と書き込みが可能な専用掲示板の存在を思い出した。

ゲーム内掲示板では個々人が様々な内容のスレッドを作成し、それに対して不特定多数の人がレスをつけていくことで連絡を取り合っており、ツリー形式で表示される。

鳳牙はもっぱら見て読む（ROM）専門で、物品の相場に関するものとモブ情報関係のスレッドをたまに閲覧している。

「その日のうちに御影さんが全部のレシピ見つけて、生産関係のスレッドに細かく書き込んだよ。その中で僕らに関係ありそうなのが今小燕の着ている」

「各装備箇所ごとに魔法防御UPの効果が付いてるマジックプレートメールなのだ。この装備のおかげで小燕ちゃんの耐久性は当社比一・二倍だぞー」

フェルドの言葉をかつさらった小燕は、がーと両手を顔の横に構えて歯をむき出しにしている。



「へえ、魔法防御が上がるのは美味しいな」

そんな小燕に微笑みながら、鳳牙はまじまじと新装備を着込む彼女を観察する。

小さい成りで重戦士を選択している小燕は、物理攻撃力と防御力において圧倒的な性能を誇るが、唯一魔法系統に対する脆さが難点だった。

物理系特化職業の宿命なのだが、それを装備品である程度克服出来るとなれば、小燕はまさに移動要塞の如き実力を発揮するだろう。

「あ、ちなみにこのマジックプレートメールって、フル装備時の防御力のうち三分の一はこのヘルメットに偏ってるんだよ。だからバケツとか言っちゃだめー」

「……………え？」

小燕の言葉に、鳳牙は一瞬言葉を失った。そしてまじまじと彼女の持つヘルメットを凝視する。

詳しい能力値はまだ分からないが、鳳牙の知識にあるプレートメイルの総合防御力を参考に計算して、その数値の三分の一がヘルメットに集中しているという事実には驚愕する。

「……………うえ」

「うぬ。気持ちは分かるで御座る。この偏りのせいで、頭だけそれを装備する効率重視の連中が増えたで御座る」

「狩場にあの頭だけで残りは裸の集団が現れた時はちょっとシユールだったね。何処のホラーコメディーかと思ったよ」

フェルドとアルタイルがそろってしみじみと頷く。鳳牙としても

想像するだにシュールだ。とても酷い光景だろう。

「頭だけなんて邪道だよじゃどー。全部装備してこそ鎧じゃん。ま、全部そろえるとミスリルインゴット計百八個と各部位で一個ずつ玉鋼とダイヤモンドを使うから大変っっちゃ大変だろうけどさー」

「え？ それミスリル製なのか？」

「うん。ほいこれ マジックプレートヘルメット<天之御影命>の性能」

小燕が言つや否や、喋った言葉と同じ文字が吹き出しと共に彼女の頭上に出現し、その一部が下線付きの直リンク文字として表示される。吹き出しは出現直後から徐々に透過されて消え始めていた。

鳳牙が吹き出しの直リンクに触れると、目の前に装備品の性能表が出現する。その材質の部分に、確かにミスリルという表記があった。

「ほんとだ。ミスリル製品だから耐久値も高いし見た目よりずっと軽い……<sup>AC</sup>ってか何だこのアー<sup>AC</sup>マークラス！ 五十・一とかどんだけだ！」

「他の部位はふつーよかちよつと硬めかな。えっと マジックプレートキユイラス<天之御影命> マジックプレートスポールダー<天之御影命> マジックプレートガントレット<天之御影命>」

新たな吹き出しの中に三つのリンクが張られる。文章量に制限があるので、小燕がそこで一度文章を切って、

「んでー、マジックプレートフォールド<天之御影命> マジックプレートタセット<天之御影命> マジックプレートグリーンブ<天之御影命> いじょー」

残りを新たな吹き出しとして出現させた。

鳳牙は小燕の頭上に羅列される装備の性能を順次確認して行き、段々と渋い顔になる。

「えっと今こうだから最後にこれを足して……………合計百五十三・七……………だど？ 最大強化オリハルコンプレートで固めても最高百三十一・四だつてのに……………これ強化したら何処まで行くんだよ」  
「あー、強化出来ないよこれ。残念だけどさすがにそういうバランス調整ががが」

「強化出来れば壊れ性能だったんだけどね」  
「うぬ。すでに壊れた性能と見る事も可能で御座る」

それぞれが新装備の性能に関して感想を述べていく。

と、続けてアルタイルが、

「拙者としては回避の性能が上がる『疾風の指輪』が欲しいところで御座るが……………」

鳳牙の知らないアイテム名を口にし、彼の興味はそちらへ移る。

「アルタイルさん。その指輪も新装備ですか？」

「うぬ。指の装飾品で御座つてな。今拙者の装備している風の指輪が回避＋五の性能で御座るが、疾風の指輪は回避＋九の性能があるで御座る」

「うっわ。それは回避マニアとしては手に入りたいですね」

鳳牙の言葉に然りとアルタイルは大きく頷き、しかし直後にしよ

んぼりした顔のエモートを出現させると、腕を組んで唸り始めた。

「どうしたんですか？」

「うぬ。実は製作に必要な『風雲石』<sup>ふうんせき</sup>の持ち合わせが一つしかない故、残り四個をどうにかして集めねばならんで御座る」

「『風雲石』ですか？ 確か俺が最後にログインした時に御影さんに渡そうと思って野良PTのドロップ分配でそれ選んだような……えっと、ちよっと待って下さい」

鳳牙は強面のバーテンへ向き直ると、メニューから銀行を選択してアイテムボックスを開いた。

緑色の鉱石アイコンを選択し、自分の持ち物ボックスへ移動させ、銀行ウィンドウを閉じる。

「ほら 風雲石 これですよ？ 何の因果か四つあるんですけど」  
「『おおっ！』『』『』」

鳳牙がリンクを貼って見せると、フェルド、小燕、アルタイルの三名がそろって驚きのエモートを出現させる。

「鳳牙殿。して、いくらにてお譲り頂けるで御座るか？」

「え？ いやいいですよ。俺が持っても御影さんにあげるくらいですし、せつかくだから使って下さい」

鳳牙はそのままアルタイルをターゲットしてトレードコマンドを実行する。

「む。待つで御座る。貴殿にとって不用品なれど、それは確かにレアドロップで御座る。対価も無しに受け取るわけには行かぬで御座

る」

「んー……じゃあ、何か欲しいもので来た時に手伝ってくれればいいですから。先行投資って事ではどうです？」

「うぬ。しかし……」

鳳牙はすでにアイテムをセットして了承のボタンを押している。

しかし、アルタイルの決心がつかないためにトレードウィンドウが開きっぱなし状態だった。このままでは数十秒で自動的にキャンセルがかかってしまう。

「いいんじゃないか？ アルタイル。好意は素直に受け取るものだよ？」

「くーっ。さすが鳳兄。あたしたちが出来ない事を平然とやってのける。そこに痺れる憧れるう。いいなー。あたしもなんか欲しー。具体的にはお金欲しー」

外野がやんややんやと後押しするが、それでもアルタイルは迷っているようだった。

これでこのままキャンセルがかかってしまうと、もう一度トレードを申し込むはかなり微妙である。さてどうしたものかと鳳牙は考えを巡らし、

「……そうだ。アルタイルさん」

「うぬ？」

「もしも俺が今これを持ってなくても、どうせみんなで狩りに行つて揃えようって事とかになるんでしょうから、早いか遅いかの違いだけじゃないですか？」

かなり苦し紛れだと鳳牙自身自覚もあるが、とにかくくにも受け

取ってもらいたい気持ちに変わりはない。宝の持ち腐れにするよりも、必要とする人の元に渡ってこそそのアイテムだ。

「……………うぬ。鳳牙殿の気持ち、確かに受け取ったで御座る」

その言葉と同時にトレードウィンドウは閉じられ、無事トレードが終了した旨のアナウンスが流れる。

「しかし、この恩はいずれ必ず返すで御座る」  
「期待してます」

無事受け取ってもらえた事に、鳳牙は内心で胸を撫で下ろす。

「うぬ。しからは御影殿に連絡を取る故、しばしだんまりで御座る。ついでに鳳牙殿の件も伝えるで御座るよ」

「え？」

「了解」

「はいよー」

鳳牙のみ疑問符を返し、フェルドと小燕はそのまま受けた。

どういう事かと鳳牙がフェルドに視線で問いかけると、

「御影さんから鳳牙がログインしたら連れてくるように言われてたんだよ。いつも通りここに集まったのはそういう理由もあつての事ってわけ。ここが一番御影さんの工房に近いからね」

「なるほど。でも、御影さんが俺に何の用なんですか？」

「さあ？ 僕らも連れてくるようにしか聞いてないんだ」

フェルドが慣れた仕草で肩をすくめ、ついと眼鏡の位置を直した。

「あたし的にはきつとサプライズな何かがあると見てるわけですよ」  
「……サプライズ、ねえ」

鳳牙は左目に古傷を持つ巖のような男を思い出す。気に入った相手としか取引をしない職人気質な人が、はたしてサプライズなど考えるだろうか。

少なくとも鳳牙の記憶に残る人物は、そういった趣向を凝らす人間ではなかった。

なんにせよ行ってみれば分かるか。

そう結論付けて、鳳牙はぐいっと体を伸ばし、パタパタと尻尾を揺らした。

その1（後書き）

H23	文章レイアウト修正	一部分章修正
11		
25		



## その2

昼間でもやや薄暗いカルテナの森は、丘陵地帯に巨木が乱立する視界の悪いフィールドエリアである。

いつも不気味なほどにひっそりとしており、他のプレイヤーの姿も特定の場所以外ではめったに見ない。

人気が少ないのは、生息する植物系・亜人系及びアンデッド系モブの平均レベルが高めである事と、三種類のボスモブ以外のドロップが渋い上にそのボスモブにすら美味しいドロップ品があまりないという点が上げられる。

このMAPでしか採れない食物系アイテムも存在するが、それらは月森の町トリエルからの入り口付近にオブジェクトモブが分布しているため、奥まで来ようとする物好きは極めて少ないのが現状だ。

「その数少ない物好きがここに四名ほどいるわけだけど、ね！」

不気味な声と共に繰り出された<sup>ボーンファイター</sup>骨剣士の斬撃を、フェルドは流れるような体捌きでかわし、手に持つ杖でカウンター気味の攻撃を加える。

打撃の効果エフェクトが光り、続いてクリスタルを打ち鳴らしたような澄んだ音と共に骨戦士の胸元で白い爆発が起こった。

フェルドの職業、『<sup>ピシヨップ</sup>司祭』のマスタースキル『<sup>エンチャントホーリー</sup>聖浄付加』の効果だ。

本来は他のプレイヤーキャラにアンデッド系モブに対する特攻を付加する魔法だが、会得者本人には恒常的にその効果が付与され続ける。

「縛鎖陣！」  
バインド

爆発で骨剣士が怯んだ隙に、フェルドは即座に拘束魔法を詠唱し、地面に浮かび上がった魔法陣から伸びる魔力の鎖が敵を絡めとる。

司祭は唯一蘇生魔法を行使できる回復魔法のエキスパートとして知られているが、その他にもステータスアップ・ダウン魔法や攻撃補助の付加魔法をはじめ、行動妨害の魔法もこなせる職業である。パーティーに一人の司祭がいるかないかで、その生存率は三割以上違うとさえ言われていた。

「アルタイル！」

「うぬ！」

フェルドの声に応じ、がんじがらめで身動きの取れない骨戦士の背後からアルタイルが右手に持つ刀を一閃させる。その一撃で、骨剣士の残りHPを全て平らげ、物言わぬ骸へと還した。

「さりとて物好きといえば　小燕殿！」

言いながら、アルタイルは刀を左手に持ち替える。空いた右手を懐に手を入れ、抜き出すと同時に何かを投げ放った。

放たれた丸い物体は放物線を描いて地面に落ち、両手剣を構えて骨剣士二体と、その一・五倍は大きい鉄鎧を着込んだ斧装備の骨戦士長ボーンキヤブテン一体の同時攻撃を防いでいた小燕の方へ転がっていく。

「今の小燕ちゃんに傷をつけるのは至難だぞ、っと」

足元に至った丸い物体を確認して、小燕は骨剣士たちの攻撃を力ずくで押し返し、その反動で自身は後方へと逃れる。

その後を追おうとして、骨剣士たちがそれまで小燕の立っていた位置へ足を踏み入れた。途端、爆音とともに突如として大きな火柱が地面から立ち昇り、骨剣士たちを飲み込む。

先ほどアルタイルが投げた火柱のわなだま畏玉の効果だ。

アルタイルの職業『忍者』は刀剣系の武器職に属するが、その真骨頂は多彩な攻撃方法にある。

強力な攻撃を避けて無効化する回避能力を盾に、刀による刺突・斬撃の他、目眩まし・目潰し・トリモチなどの各種ステータスダウンを引き起こす『なげだま投玉』、火柱・毒煙・痺れ撒菱など設置型のトラップを仕掛ける『まきびし畏玉』を使い分け、戦局を有利に展開させるオールラウンダーである。

「アル兄ナイス！ よっしこれでも喰らえっての！」

自分の身長よりも長大な大剣を小枝のように振り回し、間合いをつめた小燕が横薙ぎの一閃で火柱ごと敵を叩き切る。重戦士の放つ高威力の一撃で哀れな骨剣士はバラバラに碎けて地面に転がったが、防御力に長ける骨戦士長だけは健在のまま、行動直後の硬直で動けない小燕に狙いを定めて大きく斧を振り上げていた。

しかし、彼女はそれに焦るでもなく、

「物好きといえはなんと云っても、だよね？ 鳳兄！」

「応！」

小燕の横を、銀の風が走り抜ける。鳳牙は跳躍と同時に骨戦士長の鎧を蹴りつけ、強引に後退させた。

結果、骨戦士長の攻撃は小燕にも鳳牙にも届かず、何もない地面を叩くだけに終わる。

「やつちやえ鳳兄！」

小燕が言うのとはほぼ同時に鳳牙は隙だらけの骨戦士長に肉薄し、

「はああああっ！」

その四肢を霞ませる連続攻撃を叩き込んでいく。

鳳牙は『フィストマスター獣人』だが、基本的な戦い方やスキルは『グラップラー拳闘士』の上位職『フィストマスター拳王』と変わりはない。

全職業中最速の攻撃速度と、全ての物理系スキルをモーションキヤンセルで連携出来る利点を生かし、瞬間火力で圧倒するのがオーソドックスな戦闘スタイルである。

ただし、その回転率の良さによってスタミナの消費が激しいため、何らかの形でスタミナの回復手段を用意出来ないとすぐにガス欠になってしまう欠点がある。

スタミナをカラッポにしてしまった場合は、最大スタミナの一割まで回復しないとその場から動けなくなるペナルティがあった。

戦闘においては致命的な隙になるため、戦闘職はスタミナ管理能力が不可欠になるのだ。

特に物理防御が高い相手には自然と必要となる手数が多くなるため、スタミナ管理に失敗するとガス欠の危険性が大きくなる。

だが、こと鳳牙に関してはその心配は無用だった。スタミナ管理能力はもとより、鳳牙の持つリミテッドスキルが定石を覆す。

「ふっ！」

大きく息を吐き出すと同時に連撃を止めた鳳牙は、骨戦士長の反撃を後方に跳躍してかわす。その時にちらりと相手の残りヒットポイントを確認し、ニヤリと鋭い犬歯を覗かせた。

骨戦士長が怨嗟の声を上げながら鳳牙に近づいてくる。鳳牙は相手が自分を間合いに捉え、攻撃のために斧を振り上げて防御が疎かになった次の瞬間、渾身の踏込で相手の懐に潜り込み、続く動作で相手の鎧にそつと掌を押し当てた。

「破っ！」

気合の声と共に静かなる一撃が叩き込まれ、三分の一近く残っていた骨戦士長のヒットポイントゲージが一瞬で空になる。

骨戦士長は数瞬の沈黙の後、糸の切れた操り人形のようにその巨躯を大地に横たわらせた。

「ふえー。やっぱりそのスキルつえー」

先に仕留めた骨剣士からドロップ品を回収していた小燕<sup>ルート</sup>が、口笛を吹くように賞賛する。

「まあ、何せリミテッドスキルだしね。でも、密着しないと当たらないからこれはこれで結構使いどころが難しいんだよ」

同じように鳳牙も骨戦士長のドロップを確認し、

「ちえつ。レアはなんもなしか」

渋いドロップに顔を歪める。

そこへ、分散して応戦していたフェルドとアルイタイルがやって来た。

フェルドがずれた眼鏡の位置を直しつつ、

「リミテッドスキル『徹し<sup>とあ</sup>』。防御力無視の五倍物理ダメージだっけ？ 僕のリミテッドスキル『栄光への一撃<sup>ワンショットマックスアタックロウリー</sup>』でダメージ倍化しなくてもこれだもんなあ」

「うぬ。ダメージログに一撃で八百近いダメージが出ているので御座る。ギガンテスが十発足らずで落ちそうな威力で御座る」

「防御力無視つてのがミソだね。鳳牙は素手職だからどうしたって武器職に比べて基本攻撃力が劣るけど、そうであってもとんでもない威力だよ」

「マスタースキル使えばもうちょっと威力出ますけどね。元々このスキル、素手職限定ですから。武器持ちに同じスキルあつたらやばいですって。もしも小燕が使えたら、素でダメージ四桁超えますよ？」

「おー！ 四桁いいねー。あたしの場合ランク十スキルでも三百届かないからなー」

「「十分だよ（で御座るよ）」」」

「おー。はもったはもった」

けらけらと小燕が笑う。本当は可愛らしく笑う彼女はPTの和み系担当なのだが、今はその顔もバケツメットの下に隠れてしまっており、全く和めない。どころか不気味ささえ覚える有様だった。

「なあ、小燕。せめてフィールド移動中はそれ外さない？」  
「何で？」

小燕がちょこんと首を傾げ、疑問符のエモートが頭上に出現する。可愛いはずなのにあんまり可愛くないことに、鳳牙だけでなくフィールドとアルタイルも静かに肩を落とす。

「いや、ほら、ちょっと癒しが欲しいかなーって」  
「えー……。うーん……。じゃあ、鳳兄がそのモフモフをあたしの気のすむまで触らせてくれるならいいよー」

ずっと小燕の指が指すその先には、獣人たる鳳牙の銀毛たつぷりの尻尾がぱたぱた振れていた。

「えっと、それは」

小燕の申し出にどう答えたものかと鳳牙が思案しようとした時、

『安いもんじゃないか。それでこのPTの和み担当が復活するのなら、是非取引に応じるべきだ』

『その通りで御座る。PTの精神の安定のためにも、ここは漢を見せるで御座る』

フィールドとアルタイルから鳳牙への【ささやき】が送られてくる。

「な  
」

反射的に返事を返そうとして、鳳牙は今の言葉が小燕には届いていない事を思い出して言葉を飲み込んだ。

「……な？ な、がどうしたの鳳兄？」

「え？ ああ、いや、ちよっと待って」

鳳牙はチャットを【ささやき】に切り替え、

『何を言ってるんですか！』

『何って、そりゃ提案だよ。どうやって小燕の愛らしい姿を観察し、日々の心の疲れを癒すかという、崇高な目的のね』

『うぬ。拙者、小燕殿がああ装備を手に入れてからというもの、めったな事では外してくれない事に憤りを感じていたところで御座る。さすれば鳳牙殿、これは千載一遇の機会に御座る』

『けど、この尻尾ってリアルの自分にある物じゃないんで触れられると、その、結構来るんですよ？』

『大丈夫。どんな事になったって』

『鳳牙殿は鳳牙殿で御座る』

反論してみたものの無駄に終わった。フェルドとアルタイルの二人は結託して鳳牙に承諾を迫って来ていた。

「鳳兄？」

呼ばれて、鳳牙が再び小燕に視線を向ければ、彼女はヘルメットの奥でキラキラと目を輝かせている。



手詰まりだった。

「……分かった。取引成立だ」  
「おおっ！」

小燕が両手を挙げて喜びを表現し、フェルドとアルイタイルがパ  
ンとハイタッチを決めた。

「じゃ、早速」

ガシャガシャと金属の籠手を外して素手になった小燕は、すす  
つと鳳牙の背後に回りこみ、一切の躊躇いなくふさふさの尻尾を握  
り締めた。

「っ！」

声にならない悲鳴がカルテナの森に響き渡り、しばらくの間途絶  
える事はなかった。

「っで、さつき流れ切れちったけどさー。本当の物好きって御影じ  
ーちゃんみたいな人のことだよねー」

約束どおりにヘルメットを外して素顔を晒す小燕が、どこか上機  
嫌かつつやつやした顔で隣のフェルドに話しかける。

「そうだね。いくら基本素材を自給できるからって、カルテナの森

に限定アイテムで工房作るなんて御影さんくらいだと思うよ。というか、実際町中以外で工房持つてるの御影さんだけでしょ」

くいつと眼鏡の位置を直しつつ、フィールドが応じる。時折襲い掛かってこようとする雑魚モブに催眠魔法をかけて黙らせつつ、一行はさらに森の奥へと進んでいた。

先ほどとは違って戦闘を行わずに回避しているのは、

「うぬ。鳳牙殿、少しは回復されたで御座るか？」

「……すみません。まだ無理です。俺本体のヒットポイントがギリギリです」

アルタイルに背負われている鳳牙が小燕の尻尾攻めに撃沈し、ぐでんぐでんになっているせいである。

攻めが終わった後は全身に力が入らず、歩く事すらままならなくなっていた。

「うぬ。すまぬで御座る。よもや小燕殿にそちらの攻めの才能があるとは思わなかったで御座る」

「……………」

鳳牙としては悪夢の時間だった。そのせいか記憶の封印が行われたようで、わずか数分前の事だというのに何があったのかほとんど覚えていなかった。

ただ、『ここかー？　ここがええのんかー？』という小燕の謎の台詞だけが頭の中にこびり付いて離れない。しばらくは夢に見そうだった。

「ご迷惑おかけします」

「遠慮はいらんで御座る。なに、もう何度も通った道。戦闘を避ければ何の問題も御座らぬ故、しばし休まれるといいで御座る」

「ありがとうございます。お言葉に甘えます」

「うぬ。頼り頼られ助け合う。それが仲間というもので御座るよ」

仲間という言葉に、鳳牙は温かみを感じる。この場にいる四人は全員同じギルドに属しているわけではないが、それでも確かな仲間である。

ゲーム開始当初からさしてギルドに興味を持っていなかった鳳牙だが、最近になってもしも気の合う仲間でギルドを作ればもっと楽しいだろうかと思う事もあった。

「アルタイルさん」

「うぬ？ 何で御座るか？」

「アルタイルさんの煌星忍軍って、どういったギルドなんですか？」

だから、というわけでもないのだが、鳳牙は思わずそんな質問をしていた。

「うぬ。鳳牙殿がギルドについて聞くのは珍しいで御座るな」

「そう、ですか？」

「うぬ。まあそれはさておき拙者のギルドで御座るが、なに、いわゆる特化ギルドというやつで御座る」

「特化ギルド……？」

聞きなれない言葉に、鳳牙は疑問符のエモートを出現させる。

アルタイルがはっはっはと大きく笑い、

「難しい事は御座らん。煌星忍軍への参加条件は二つに御座る。その一、職業が忍者であること。その二、キャラクターの名前が星に関係するものであること。それだけで御座る」

「……えっと、それはつまり、ギルドの構成員が全員忍者だけってことですか？」

「然り。現在総勢で十二人が登録されているで御座る。星の名前はそれなりに人気がある故、片仮名・平仮名・ローマ字表記と様々で御座るな」

アルタイルはつらつらと一等星の名前やら星座の名前を並べていく。鳳牙に聞きなれたものもあれば、初めて聞く名前もあった。

「月に一度は全員でイベントを行っているで御座る。忍者のみでのボスモブ討伐はなかなか熱いで御座るよ？」

快活に笑うアルタイルの背で、鳳牙は十二人揃い踏み of 忍者軍団を想像する。

ある者は斬りかかり、ある者は投玉をぶつけつつ、四方八方から間断なく霰玉を設置して圧殺する。実に爽快な光景だろう。

専門の回復役はいない。盾役もない。安定性に欠ける構成による狩り。

それは効率を考えれば決して成り立たないだろう。心底ゲームを楽しもうとするからこそ、また同じ職業同士という連帯感があればこそ成立する遊び方だ。

「いいですね、そういうの。すごい楽しそうです」

「うぬ。CMOはゲームで御座る。ゲームとは楽しんだ者が勝ちに御座るよ」

アルイタイルの言葉はもつともだった。ゲームとは楽しむものであって、楽しめないものはゲームではない。

初めてログインした時、鳳牙は確かにCMOを楽しんでいた。キヤクター操作に慣れ、夢中になって強くしていった。強くなっていく過程が面白かった。

一人でやれることの大半をやりつくした頃、偶然にもリミテッドスキルを会得し、その威力に酔った。

それからの期間が、鳳牙にとって一番苦痛な時期でもある。

周囲から引つ張りだになり、初めの内は喜んでそれに応じてもいた。だが、やがてそれらが単に効率的な面での鳳牙を求めただけで、決して鳳牙と楽しもうと考えている者はいないという事に気が付いてしまった。

そんな付き合いに辟易して、鳳牙は突発的な野良パーティーに加する時以外、完全なソロプレイヤーとして活動していた。

あの日フェルドと出会い、流れでアルタイルを紹介され、狩場で小燕と出会うまで、鳳牙はずっと一人で 独りだった。

アルイタイルの大きな背中 に体重を預けつつ、鳳牙はしばらくとうとうとして精神的な疲れを癒して行く。

そんな起きているのか寝ているのかという境界をしばらく行ったりきたりしていると、

「着いたー」

という小燕の元気な声が聞こえてきて、鳳牙は意識を覚醒させた。

ひよいとアルタイルの肩越しに前方を見れば、巨大な焼き釜とそれに隣接するレンガ造りの家屋が見えた。最早見慣れた光景の一つだ。

「アルタイルさんありがとうございます」

「うぬ」

礼を言ってその背中から降りると、鳳牙は改めて目の前の工房を見つめる。すると、

『いつまでもそんな所におらんで、着いたのならとつと入って来い』

ややしゃがれた壮年の男の声で【ささやき】が送られてきた。

「だそうですよ？」

「よく工房の中から外の様子が分かるよね」

「うぬ。只者では御座らんからな」

「生産職かと思ったら実は『武者』サムライですげー強いもんねー」

それぞれに反応を返しつつ、四人は歩を進める。工房の扉は頑丈そうな鋼鉄製で、家主と家主の許可が与えられた者以外には絶対に開けない仕様になっている。

鳳牙が扉に触れると音もなく扉が開き、四人はそろそろと工房の中に足を踏み入れた。

「来たか」

中へ入った四人へ向けて、工房の奥、作業台の向こうから声が聞

こえてくる。

そこには鳳牙よりもやや背の高い、浅葱色の着流しを着た白髪の老人が立っていた。左袖は中身が無いためにぷらぷらと揺れているが、隻腕というわけではなく、左腕は胸元に収まりつつ懐の隙間に引っかかっている。

白一色の髪は腰まで伸び、刀の鰐を髪留めにしてまとめていた。だがもつとも目を引くのは、左の黒瞳を縦に走る裂傷の跡だろう。

さながら、時代劇に出てくる老年の侍といった風情の人物である。

頭上に表示されるキャラクターネームはあめのみかげのみこと天之御影命。長つたらし  
いのでみんな御影と縮めて呼んでいる。

職業はメイン職として『武者』なのだが、ステータス上は四つ以上の生産スキルを一定以上極めた上で転職可能な『マイスター匠』となっていた。

CMOにおいてはメイン職業として戦闘職八種類、生産職六種類、確認されている上位職が十六種類存在し、それぞれに職業専門スキルが存在する。これらの内、生産職の職業スキル鍛冶・裁縫・木工・宝石細工・料理・錬金術はメイン職業として選択していいなくても複数、あるいは全部を鍛える事が出来る。

ただし、メイン職として生産職を選択した場合は様々な生産補助効果を受ける事が出来るため、通常職を選択した上で生産スキルを取るプレイヤーは少ない。

その中で御影は料理と錬金術以外の四つを極めた『匠』であり、補助効果無しで最高級品の『刻銘』武具を作成出来る強者であった。

「ふん。言いつけ通りに連れて来たみたいだな」

「ええ。御影さんの頼みとあれば、例え内容が分からない依頼であっても受けますとも」

フェルドが仰々しく礼をすると、御影は顔にしわを刻んでちつと舌打ちを漏らした。

「あ、えっと、お久しぶりです御影さん。今日は何か俺に用がある」と聞いたんですけど……」

割といつものやり取りなので、鳳牙は内心で苦笑しながら御影に話を振る。こういうときの進行役は決まって鳳牙が受け持っていた。

「ん？ ああ、そうだ。ま、とりあえず適当にその辺に座れ」

顎で示されたところには、ちょうどよく四脚の椅子がある。各々促がされるがままに椅子に腰掛けた。

全員が腰掛けたのを確認して、御影がすっと小さく息を吸い込む。

「今日来てもらったのは他でもねえ。ちょっとした素材を取りに行つて欲しいと思つてな」

「素材、ですか？」

鳳牙は内心で首を傾げた。御影から材料の調達を依頼される事は珍しい事ではないが、今回のように直接呼びつけられた上で依頼をされた事は一度もなかったからだ。

ただ単に依頼するだけならそれこそ【ささやき】などで伝えてもらえればすむ話である。



そう考えたのは他の三人も同じのようで、そろって疑問符のエモートを発生させていた。

「いったい何の素材ですか？」

「……火之迦具土神カグツチの魂だ」

「……………は？」

聞きなれないアイテム名に、鳳牙はぱちぱちと目をしばたかせて間の抜けた声を出す。

正確に言えばそのアイテムを持ってそうな相手に心当たりはあるが、そのようなアイテムをドロップするという話を聞いたことがないのだ。

それは他の面々にしても同じだろう。再び頭上に疑問符のエモートが出現していた。

「いや、別に火之迦具土神じゃなくてもいい。建御雷之男神タケミカツチでも閻御津羽神ラミツハでも構わねえ。いずれにせよ、それら神々のいずれかの『魂』という素材を手に入れてきて欲しい」

「えっと、御影さん？」

こちらの状況に構わずぼんぼんと話を進める御影に対し、鳳牙がストップをかける。

「なんですかその神々の『魂』って。そんなものドロップしましたっけ？」

「ああ？ ……あー、そうか。悪いな。お前らはレシピアを見てないんだっとな」

何かを思い出したようにポンと御影が手を打ち、しばらく止まっ  
たかと思うと、

「ふむ。さしあたってこれだな。 鍛冶レシピ 轟炎拳カグツチ  
確認してみろ」

御影の頭上に表示されるチャットウィンドウ。そこにはまたも見  
慣れない、おそらくはナックル系統の武器の名前があった。

言われるがままにリンク文字を選択すると、目の前に作成に必要  
な材料の一覧が表示される。

「えっと、基本武器がオリハルコンナックルで、他に紅蓮石<sup>くれんせき</sup>二十個  
とミスリルインゴット一個と……ああ、ここでさっきの火之迦具土  
神の魂が出てくるのか」

「なるほどね。でも、素材もそうだけどこんな武器聞いたことない  
な。神の名前を冠する武器、か。この前のアプデで追加されたもの  
なのかな？」

「うぬ。しかし追加された物は公式発表では名前は伏せられ申した  
が、種類は公示されていたで御座る。それに沿ってまさに御影殿が  
全て発見済みでは御座らぬか」

「だよねー。過去のアプデだとしても今更出てくるなんておかしー  
もん」

鳳牙は表示されるレシピウィンドウの中から作成物のアイコンを  
選択し、その性能を確認しようとするも、全ての項目が疑問符で埋  
まってしまったので、やや拍子抜けしつつそのままウィンドウ  
を閉じた。

「しかもこれ、性能が見れませんね」

「あ、本当だ。という事は、これはまだ一度も作られたことが無い

って事になるよね？」

「CMOの仕様ではそういう事になるで御座るな」

「おー。全くの未知ってやつだねー。御影じーちゃん、これなーに？」

「それを調べたくてお前らを呼んだんだ。少数精鋭で『神殺し』を達成出来そうなやつなんぞ、知り合いにそうはいねえからな」

すりすり右手で顎を擦りながら、御影はくああと大きな欠伸をした。

鳳牙はその欠伸が収まるのを待って、

「ところで御影さん、そもそもこのレシピどうしたんですか？」

「知らん」

即答だった。あまりの即答っぷりに、鳳牙は思わずそうですかと返事をして流してしまうところだった。

「えっと、いや、あのー」

「アップデートの日にいつの間にか工房の収納ボックスに紛れ込んでやがったんでな。それとなく生産仲間に聞いてみたが、他に出没ってる代物じゃ無さそうときた。で、面白そうだからちよいと隠しといたってわけよ」

かっかっかと御影が独特の笑い声を上げる。彼は作業台の上においてあったキセルを取り上げ、火をつけて口に加えた。

「運営に通知してもよかったんだが、せっかくの機会だと思ってな。連絡する前にちよいと作れるのかどうか試してみたいわけよ。まあ、やつこさんがちゃんと魂落とすかどうか分からのが問題だがな」

御影がキセルを吸って、ぱかりと開けた口から紫煙を吐く。

「で、だ。そういう依頼なんだが、受けてみる気はあるか？」

どこか挑発的な物言い、御影が鳳牙たちに問いかけてくる。鳳牙は左右を見て、それぞれの表情をうかがった。

フェルドは肩をすくめつつ、どちらでもという反応だった。アルタイルは腕を組んでじっと鳳牙を見つめ返してきた。小燕にいたっては、ドキドキワクワクという擬音が見えそうなほどそわそわしている様子だ。

そんな仲間たちの様子を確認して、

「いいですよ。正直新しいナックル系統の武器っていうだけで、俺に断る理由が無いですから」

鳳牙は御影にそう返答した。

「かつ。お前さんはそう言うと思ったよ。なら話は早い。っと、そっぴやさつき火之迦具土神でなくてもいいと言ったが、もしその討伐に行くなら餞別を渡せるぜ？」

「餞別ですか？」

「おうとも。ちょっと待ってる。全員取れるように露店を開くからよ」

言って、御影はごそごそと何かを取り出すような仕草をして、

「よし、もってけドロボー」

その頭上に露店中を意味するアイコンを表示させた。

御影をターゲットして鳳牙がトレードを申し込むと、販売アイテム一覧というウィンドウが表示され、合計で四つの真紅の外装アイコンが表示される。

アイコンの下にはそのアイテムの販売金額が表示されるのだが、今の表示は〇ゴールド（G）となっていた。つまり無料である。

「うわ、これ『イフリートマント』じゃないですか！ 御影さんこれ露店で買ったなら五十万ゴールドはくだらないですよ！？」

突然、フェルドが大きな声で驚きの言葉を口にした。

慌てて鳳牙がアイテム性能の表示ウィンドウを確認する間に、

「なんと！ 属性ダメージ二割削減のあの装備で御座るか！」

「すっげー。本物手に取んの初めてだー」

すでに露店から真紅の外装を入手していたアルタイルと小燕が手に持ってしげしげと眺めている。

「……ほんとだ」

遅ればせながら鳳牙も外装を〇ゴールドで購入し、その性能を確認する。

背中の装飾品扱いの防具で、付与効果は火属性攻撃のダメージを二十パーセント軽減するというものだ。一撃の重い神クラスのボスモブとの戦闘においては、この性能差は十分に生死を分ける。

これ以上ないくらいの饒別だった。

「御影じーちゃん。これもらっていいの？ それともレンタル？」

外套をぎゅっと胸に抱いて、小燕が自然な上目遣いで御影に尋ねる。思わずにやけそうになる可愛さだ。

だが、御影は特に顔をほころばせるでもなくふんと鼻を鳴らし、

「当然くれてやる。武具は使われてなんぼだ。金儲けなんぞくだらんくだらん」

実に太っ腹な宣言をする。生産職の鏡だった。

「そのかわり、火之迦具土神の魂は頼んだぞ。ああ、あとオリハルコンナツクルは鳳牙、前にお前に作ってやったやつを寄越せ。どうせボス狩りくらいにしか使ってねえんだろ？」

「どころか『徹し』使う時に持ち替えて使うくらいですね」

「けっ。貧乏性だな」

「そうは言っても、耐久値が金属武具の中で最低なんですから無駄打ちが出来ないんですよ。それになんといっても維持費が高いです。修理にインゴット一個使うんですから」

オリハルコン製の武具は金属製の武具でもっとも高い性能を誇るが、その反面耐久値が最も低く設定されている。そのため、下手な使い方をするとすぐに壊れるのである。

特に鳳牙は『徹し』があるとはいえ、基本的には手数が多さで攻める戦闘スタイルだ。そのため、一度の戦闘で耐久値がゴツソリ削れる事も珍しくない。

CMOでは武具は壊れると消滅してしまつたため、耐久値が〇になる前に修理をしなければならず、数値には常に気を配る必要がある。

「今の相場だとオリハルコンインゴット一つで八万ゴールドってところか。お前さんなら普通に狩って二・三日ってところだろう?」  
「PT狩りで得た全部の稼ぎを独占してつぎ込めばですけどね」

実際は参加人数で分配するため、レアドロップでもない限りは何倍もの日数がかかる。

「ふん。それが嫌なら自分で採掘してくるんだな。生産職の俺でも採ろうと思えば採れるんだ。お前さんに出来ないどおりはねえだろうよ」

「御影さんは絶対生産職の枠組みから逸脱してると思います。というか、御影さんメインが武者じゃないですか」

「けっ。大昔から刀匠ってやつは名の知れた剣豪でもあるんだぜ? 己で作った刀を己で使いこなせないで何が刀匠だ」

とんでもない暴論だった。生産持ちのキャラクターが全員御影並に強かったとしたら、鳳牙たち通常戦闘職のキャラに居場所が無い。

鳳牙はボスモブに群がって嬉々とした表情で素材を剥ぎ取る鍛冶師や裁縫師たちの姿を想像し、思わずぶるっと身を振るわせた。想像であつても悲しい悲鳴を上げるボスモブに合掌せざるを得ない。

「ま、とにかくだ。出来りや二・三日の内には持つてきてくれるとありがてえな。次の定期メンテで無くなっちまうかもしれないよ」  
「ああ、それもそうですね。分かりました」

鳳牙は御影に対して頷き、仲間の方へ顔を向ける。

「それじゃ、準備して行ってみましようか。『神殺し(クエスト)』」

は帝都で受けるんですけどっけ？」



### その3

CMOは『混沌神話』の名称の通り、世界各地の神話や説話などから様々な設定や名称をごちゃ混ぜに取り入れている。

ギリシャ、北欧、日本など古くからゲームの題材にされてきた有名どころはもちろん、あまり馴染みのない神話からの登場人物や神々も存在する。

彼らはクエストを与える役目を負っていたり、特殊なアイテム取引を行ってくれたりするノンプレイヤーキャラ（NPC）としてCMOの世界各地に存在していた。

だが、神々はそういった協力的な存在ばかりでなく、むしろ特殊なボスモブとして各地に配置されている方が圧倒的だった。

神々は特定のフィールドに存在する『スピリチュアルゲート神界門』から入場できる決戦用フィールドにあり、神界門の使用には専用のクエストを受注する必要がある。火之迦具土神討伐クエストは、CMOで最大規模のタウンエリア『帝都ウルフィス』で受注する事が出来た。

そういった理由から、鳳牙たちは神殺しに挑戦するため、御影の工房を後にして一路帝都へと向かうことにした。

フェルドとアルタイルは一足先に帝都へと飛んでいる。CMOにはギルド構成員のみが購入・使用の出来る『召喚状』という空間転移アイテムが存在し、これを使えば一瞬で所属ギルドが設定している『ホーム本拠地』への帰還が可能なのだ。

アルメリア騎士団も煌星忍軍も本拠地は帝都に存在するため、物資補給など事前準備の時間短縮の意味も兼ねて、先行したのである。

ギルドに所属していない鳳牙と小燕は、先の二人のような転移アイテムも『魔術師<sup>ソイサラ</sup>』の使えるような転移魔法も使えない。知り合いに魔術師がいれば対価を払う事でいわゆる転送タクシーの依頼を出す事も出来るが、あいにくソロがメインの二人にはそういった知り合いはいなかった。

つまるところ地道に徒歩で行くしかないのだが、帝都まではそれなりに距離があり、VRの世界ではちよつとした旅と同じくらい時間がかかってしまう。

ではどうするのかといえば、実のところ鳳牙には秘策がある。『獣人』へ転職したとき、鳳牙は特殊な職業スキルを習得していた。それは

「うつひょー！ はやいはやい！」

「喋ると舌を噛むぞ」

鳳牙はただっ広い草原を、文字通り風の如き速度でかけていた。その姿は今、全身を銀色の毛に覆われた大きな狼に変化している。

その背にまたがる小燕は、いけいけと嬌声を上げながら薄紫のポニーテールを風に遊ばせていた。ごてごてした鎧を持ち物ボックスに放り込んだのか、その格好は明るめの黒いアンダーウェアだけの何も装備していない状態になっている。

特殊上位職『獣人』には、『獣化<sup>ビーストフォーム</sup>』という職業スキルがある。モチーフとなる獣に姿を変える事が出来るスキルで、通常攻撃以外の攻撃手段がなくなる代わりに、普段の三倍以上の速度で移動することが出来るようになるのだ。

また、一人限定だが背中に乗せて運ぶ事も出来るため、ペアでの行動であれば都市間移動や狩場への移動時間が大幅に短縮出来る。

尻尾や獣耳といった本来の自分にはない器官が付加されるどころではなく、姿形そのものまで人型から変化してしまうとんでもないスキルだが、尻尾と同じく身体の動かし方のコツを掴んでしまえば難しくはないスキルだった。

カルテナの森からトリエルを通過し、今はシルフェリシア大草原を横断中である。

CMOにおいてはキャラクターのステータスがそのまま身体能力に置き換わるため、鳳牙はスタミナが続く限り走り続ける事が出来る。

帝都ウルフィスへはあと三つのフィールドと一つの町を駆け抜ける必要があるが、鳳牙の感覚ではスタミナを十分に残しつつ三十分もあれば走破出来る計算だった。

途中で数人のプレイヤーキャラとすれ違う事があったが、皆一様に啞然とした表情で鳳牙と小燕を見送った。

小燕はそんな彼らに盛んに手を振っていたが、誰一人として手を振り返せるほどに短時間で衝撃から立ち直れるものはいなかった。

そもそもが現在は鳳牙以外に存在しない『獣人』の職業スキルである事に加え、鳳牙がめったに獣化を使わないため、他のプレイヤーがこの姿を見る機会など皆無に近いせいだろう。

めったに使わない理由は、通常攻撃しか出来なくなるという制限の他に装備品が全部外れてしまうという欠点もあるためである。獣

化して装備が外れた時、持ち物ボックスに余裕が無いとあぶれたものを地面に落つことになってしまうのだ。

狩りに行く時はまだしも、帰ってくるときはまず使用出来ないという、使いどころを選ぶスキルなのだ。

ちなみに背にまたがる小燕が鎧を脱いでいるのは、鎧のままだと鳳牙が痛いためである。決してやましい気持ちがあるわけではない。

「お……。小燕、そろそろ『交易都市バンボス』に入る。人を避けて建物の屋根とか走るから、振り落とされないようにしっかりと捕まっとけよ」

「あいあいさー。こんな楽しいものを途中で降りてたまりますかっ  
ての」

元気な返事を返しつつ、小燕が鳳牙の背中にピタリと身体を押し付けつつぎゅっと銀色の毛を掴む。その感触を得て、鳳牙はフィールドとタウンエリアを繋ぐホログラムの立体映像のような半透明の紋章型トランスポーターに突進し、

「ふっ！」

視界が草原から石畳の町中へ切り替わると同時に跳躍。近くの建物の屋根に着地する。

突然出現した銀狼に周囲のプレイヤー達が慌てふためく声を見無視し、鳳牙は建物の屋根から屋根へ次々に飛び移って町の中を進んでいく。

「おー。バンボスの町って上から見るとこんななんだ。あ、鳳兄鳳兄。掲示板で大騒ぎになってる。バンボスの街に銀色の狼モブが潜

入！ だつてさ」

いつの間にか身を起こしていた小燕がそんな報告をしてくる。鳳牙が心配したほど強くしがみつくな必要が無かったようで、景色を楽しみつつのんきに掲示板を眺めていたようだ。

「別に構わないさ。モブだと思われてるなら個人的に助かる」

「えーっと……にゃ、背中に乗ってる少女があられもない姿な件ついて……？」

スレッドの上から閲覧していたであろう小燕が、ぶつぶつとそんな事を口走っている。

確かに、初期装備である布の服すら装備していない状態で町中にいるキャラクターなどめつたにいない。ゲームとはいえ下着姿を衆人環視にさらす度胸のある女性が多いはずが無い。

小燕も最初は鳳牙の乗り心地に興奮していて気にしていなかったのだろうが、ここに来て羞恥心が芽生えてしまったようだ。

「ほ、鳳兄……。鎧着ちゃダメ？」

「痛いから駄目。もうちょつとで町を抜けるから耐えろ」

予想していた小燕のお願いを、鳳牙は即答で一蹴する。

「お、鬼！ 悪魔！ 変態！ 幼女趣味！」

「自分、狼なんで」

「鳳兄のバカーっ！」

小燕の悲鳴を後ろに流しつつ、鳳牙は一際大きく跳躍して、その勢いのままに次のトランスポーターに飛び込んだ。

帝都ウルフィスは常に活気にあふれている。

それは単にCMOにおける最大の都市であるというだけでなく、ゲームを始めたばかりのプレイヤーがまず最初に訪れる場所であり、大手ギルドの本拠地が数多く存在するせいでもあった。

ウルフィスは東西南北と中央区の五区に大別され、それぞれに違った毛色を持つ大都市だ。

北区は王侯貴族の居住エリアになっており、高難度のクエストが受注できる。

西区は一般的な居住エリアとなっており、中難度のクエストや特殊なクエストを受注する事が出来る。

南区は生産エリアで、ノンプレイヤーキャラから各種アイテムを購入する事が出来る。職人系のギルドはこちらに本拠地を置いている場合が多い。

中央区はマーケットエリアで、プレイヤーキャラの露店がひしめいていたり、パーティーの募集なども盛んに行われている。

最後の東区はギルドエリアとも呼ばれている。これは帝都ウルフィスで唯一ギルドの本拠地を設定できるエリアであるせいだ。

また、新規プレイヤーが転送されてくる最初のホームポイント地点であり、低難度のクエストを受注できる場所でもある。

ホームポイント付近では新人プレイヤーへの積極的なギルド勧誘が行われており、それはまるで大学のサークル勧誘を彷彿させるにぎやかなものだ。

フェルドはそんな東区にあるアルメリア騎士団の本拠地へ飛んだあと、その場にいたギルドメンバーへの挨拶もそこに本拠地である建物から外に出て、すぐさま中央区へ向かった。

帝都の中心部にある巨大な噴水を称える広場にはプレイヤー達の露店がひしめき、手売りをしているプレイヤーの威勢のいい声がそこかしこで上がっている。

喧騒の中、フェルドは人々の隙間を縫うようにして進みつつ、露店巡りをしていった。

同時期に帝都へ飛んでいるアルタイルとはすでに【ささやき】で連絡を取り、アルタイルが自分自身の物資補給を行っている間、フェルドが先行して四人分の回復薬や食料を調達する役割分担になっているのだ。

すでにフェルドの魔法でまかなえない部分のステータスアップ系食料は確保しているので、今は回復薬を探している最中である。

市場の在庫が不安だけどフルヒールポット（FHP）をそれぞれに五つは揃えておきたいな。

フェルドは司祭という職業の役割をしっかりと理解している。パーティーのパラメーターに常に気を配り、誰一人として死なせる事無く勝利に貢献する。いわゆるヒーラーという立場だ。

鳳牙、アルタイル、小燕との四人パーティーで狩りを行う時は、それぞれの技量が高い事もあって回復するというよりはステータスダウン系の魔法スキルを使う事が多いのだが、なにせ今度の相手は神である。

神系のボスモブは伝承上の弱点が明確な場合を除き、ほぼ全てのステータスダウンが通用しない。毒などの状態異常は低確率ながら効果があるが、それらのほとんどは司祭ではなく魔術師系の魔法スキルになる。

加えて、神モブは通常のボスモブよりも圧倒的に一撃が重い上、そのほとんどが範囲スキルである。生半可な実力で挑むと、それこそ一発で五人フルパーティーが蒸発する事態になりかねない。場合によっては魔法詠唱が間に合わない事もあるため、ボスモブ攻略に回復薬の準備は怠ることの出来ないものである。

いくつかの露店を巡って、もっとも安く販売しているところから必要な分を購入していく。帝都は人数に比例して物価競争も盛んなため、面倒を厭わなければ賢い買い物が出来る。また、希少品は根気よく探さなければ見つけれられない。

その過程で装備関係の露店も巡り、フェルドは愛用しているローブのストックを購入しつつ、特殊アイテムを販売している露店から今回の討伐の肝になるアイテムを一つ購入すると、一度酒場へと向かった。

銀行のアイテムボックスを開き、必要な物と必要ではない物を整理して、ついでに持ち金をすべて預けた。

『フェルド殿』

と、ちょうどアルタイルからの【ささやき】が来る。内容は準備



が整ったのでフェルドの方を手伝うというものだったが、

『いや、こっちももう終わった。先に集合場所に行っていてくれな  
いか。僕もすぐ行くよ』

『承知したで御座る。……ところで、掲示板は見たで御座るか？』

もとよりフェルド以外には聞こえないというのに、アルタイルが  
まるでひそひそと話すようにささやいて来る。

そんな様子にフェルドは内心で首を傾げ、

『見てないけど、何か面白いのでもあった？』

掲示板を開く準備をしながら返事を返した。

『一頁目の上から三番目。エッジというキャラ名のスレッドを確認  
して欲しいで御座る』

相変わらずひそひそと話してくるアルタイルに言われるまま、  
フェルドは掲示板のスレッド一覧を眺める。その中から、現状では  
四番目になっている『投稿者名：エッジ バンボスの街に銀色の狼  
モブが潜入！』というスレッドの全表示を選択した。

投稿者名：エッジ バンボスの街に銀色の狼モブが潜入！

やっべーぞバンボスにモブ侵入してきやがった！

潜入！

投稿者名：迷探偵 Re：バンボスの街に銀色の狼モブが

いや、タウンエリアにモブ入って来ないから。

潜入！

投稿者名：たすく Re：バンボスの街に銀色の狼モブが

<<エッジ

どんなモブ？

<<迷探偵

何かのイベントじゃね？ 突発的な都市襲撃イ

ベントとかさ。

別ゲーとかだと割とポピュラー。

投稿者名：那須野与壱 Re：バンボスの街に銀色の狼モ  
ブが潜入！

うわマジだ。何か大きい銀色の狼が建物の屋根  
の上を飛んでったぞ。

投稿者名：エッジ Re：バンボスの街に銀色の狼モブが  
潜入！

<<たすく  
銀色の狼。結構でかい。

投稿者名：パパラッチャー Re：バンボスの街に銀色の  
狼モブが潜入！

マジ？ 誰かスクショ撮ってない？ 撮ってた  
ら貼って。

投稿者名：エッジ Re：バンボスの街に銀色の狼モブが  
潜入！

<<与壱  
ぎゃーす。負けた……

投稿者名：越前守 Re：バンボスの街に銀色の狼モブが  
潜入！

ちよい待ち。今知り合いが激写したって言って

るから貼るように言ってみる。

（笑）

<<パパラッチャー

自分で撮れねーとか名前負けしてんじゃねーよ

投稿者名：てすタメント　どーでもいいが……

い姿な件について。

問題の狼の背中に乗っている少女があられもな

潜入！

投稿者名：リリイ　Re：バンボスの街に銀色の狼モブが

<<てすタメント

詳細を求める。詳細を求める！

大事なことなので二回言いました。

ってかどーでもよくないから。

むしろそっちメインだから。

入！

投稿者名：旅鳥　Re：バンボスの街に銀色の狼モブが潜

俺も激しく興味があるんだが。<<少女

投稿者名：てすタメント このロリコンどもめ！

ぱつと見、多分装備全部外したアンダーウェア  
なんだろうけどな。

狼が相当な速度で動いてたから、ちょうどおい  
らの前を通過する時に  
それがめくれて少女の可愛いおへそがこう、ば  
つちりとね？

投稿者名：ウニコ Re：バンボスの街に銀色の狼モブが  
潜入！

くくてすタメント  
当然スクショは万全なんですよね？  
是非ともそれを貼り付けてください。今すぐに。

投稿者名：エム大佐 Re：バンボスの街に銀色の狼モブ  
が潜入！

三分間待つてやる。

潜入！

投稿者名：ヘブン Re：バンボスの街に銀色の狼モブが

お・へ・そー！ お・へ・そー！

潜入！

投稿者名：鹿之助 Re：バンボスの街に銀色の狼モブが

おおかみよ、我に少女のおへそを与えたまえ！

ブが潜入！

投稿者名：ラッタッタ Re：バンボスの街に銀色の狼モ

<< 鹿之助

おお神よが狼よつてか？ やかましいわ（笑）  
鹿は狼に喰われてしまえ。

投稿者名：レフ えと……？

越前守に言われてスクショを張りに来たわけだ

が、

何この状況？

空気読むべきなの？ 読まなくていいの？

教えてエ イ人！

投稿者名：エマイト Re：バンボスの街に銀色の狼モブ  
が潜入！

<<レフ  
呼ばれた気がしたので。  
件の少女も一緒に映ってるならいいんじゃないか？

投稿者名：レフ Re：バンボスの街に銀色の狼モブが潜  
入！

<<エマイト  
ちよつと似ててファイタ（笑）  
あー、うーん、ピンボケしてるけどまあいいか。  
ほいさっさつと。      これね

非常に心当たりのある内容だった。フェルドは思わず眼鏡を外し  
て眉間を指でつまむ。

ややあってから掲載されているスクリーンショットを確認し、フ  
エルドはそつと掲示板を閉じた。思わず溜息を吐き出してしまふ。

『フェルド殿？』

チャットを【ささやき】にしたままだったため、溜息が伝わってしまったようだ。アルタイルがおそろおそろといった感じで声をかけてきた。

『いや、なんでもないよ。時間的に見て、まあ後十五分もすれば集合場所に着くんじゃないかな』

『承知したで御座る。拙者は一足先に西区へ行っているで御座る』  
『了解』

チャットの設定を通常に戻し、フェルドはもう一度大きな溜息を吐いた。

「……………集合場所に行けば僕も見れるのかな？」

ぼそりと、誰にも聞き取れないような小さな声でそう言って、フェルドは酒場を後にした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8274y/>

---

Chaos\_Mythology\_Online

2011年11月26日19時48分発行